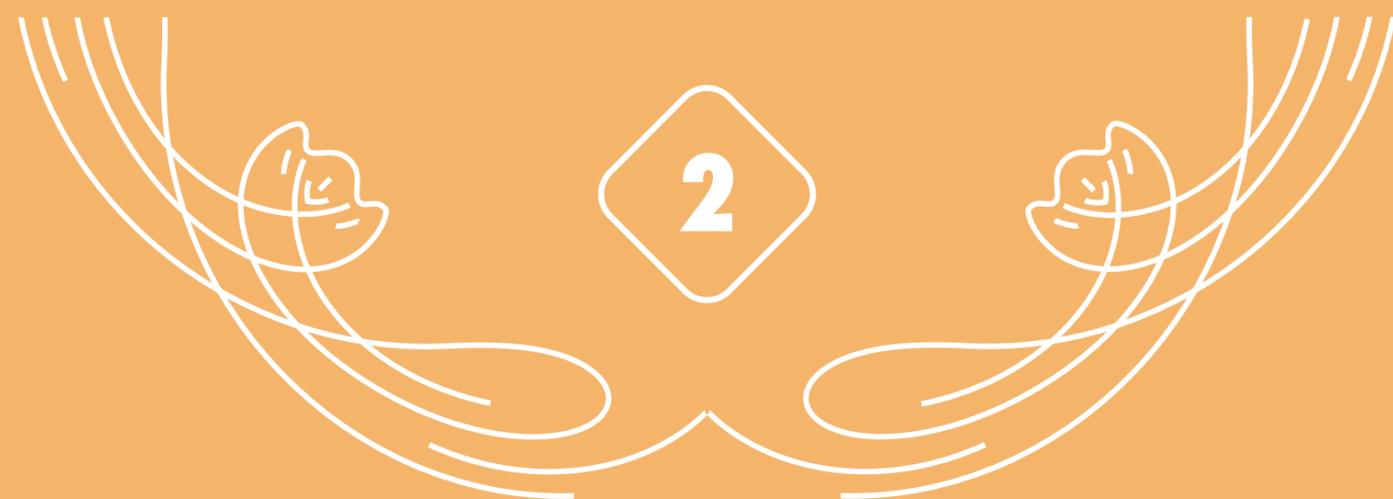




マイレボTALK

MY HUMAN REVOLUTION



第4巻 「立正安国」の章

テーマ

立正安国って何？



「立正安国」の章の舞台 1961年

- ・ 火災、豪雨が甚大な被害を及ぼしていた
- ・ ポリオ（小児まひ）が大流行
- ・ 東西冷戦が影を落とし、「対立」「分断」する世界

→ どうしたら事態を好転させることができるのか？

世界中の人々が頭を悩ませていました。

今後、社会・平和のために学会が着手すべき課題は増えていくにちがいない。

山本伸一は、立正安国という仏法者の目的と使命を再確認しておきたいと考え、夏季講習会で「立正安国論」の講義をすることに決めました。

「立正安国論」 なぜ・いつ書かれたの？

大地震、飢饉、疫病……「なぜ、これほど苦しまなければならぬのか？」。途方に暮れる民衆の姿に接し、日蓮大聖人は胸を痛めていました。

大聖人は不幸の原因を明らかにしようと行動を開始し、経文を次々と精読していききました。そして、「立正安国論」をしたため、1260年（文応元年）7月16日、事実上の最高権力者である北条時頼に提出しました。

人々とともに悩み、苦しむ大聖人の振る舞いが、胸にありありと浮かんだ山本伸一。彼は「立正安国論」講義で次の御文を引きました。

「^{みだ}国土^ま乱れん時は先^きず^{じん}鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民乱る」(御書19、31ページ)

鬼神
(思想)の乱れ

万民の乱れ

国土の乱れ

山本 伸一

鬼神というのは、目に見えない超自然的な働きをもつものですが、現代的にいえば、思想も、その一つといえます。つまり、国土、社会が乱れる時には、まず、思想の乱れが生じていきます。そして、この思想の混乱が、人びとの生命を蝕み、意識や思考を歪め、それが、社会の混乱をもたらす原因となっていくのです。(286 ページ)

ちょっと考えてみよう

思想の乱れ——

小説の中では「人間という原点を忘れた考え方」とも表現されています。

では、社会を良くするために、どうすればいいのでしょうか？

伸一は次の御文を引きました。

「^{すべから}須^{いっ}く^{しん}一身の^{あん}安^ど堵^{おも}を^ま思^しわ^{ひょう}ば^ま先^しず^{ひょう}四^{ひょう}表^{ひょう}
^{せい}の^{ひつ}静^い謐^{もの}を^{いの}禱^{もの}らん^{もの}者^{もの}か」(御書31ページ)

意味：当然のこととして、一身の安堵、つまり、個人の安泰を願うならば、まず、四表、すなわち、社会の安定、世界の平和を祈るべきである

山本 伸一

社会を離れて、仏法はない。宗教が社会から遊離して、ただ来世の安穩だけを願うなら、それは、既に死せる宗教です。本当の意味での人間のための宗教ではありません。

(中略) 社会の安穩を願い、周囲の人びとを思いやる心は、必然的に、社会建設への自覚を促し、行動となっていかなざるを得ない。(288 ページ)

「立正安国」とは——

「正を立て国を安んずる」

生命尊厳の仏法哲理を一人一人の胸中に打ち立て、その行動の帰結として、社会の繁栄を築いていくことです。

つまり、日々の勤行や励まし、対話など、各人の立場で考え、行動していくこと＝「立正安国」の実践なのです。



「立正安国」の理念に基づく多角的な取り組み

平和

核兵器廃絶と
反対の潮流の
拡大

震災時の
復興支援

文化

音楽隊・
鼓笛隊などの
交流

人格高潔な
人材を政界に
送り出す

何よりも…

教育

教育部・
青年教育者の
実践活動

私たちの身近な行動が社会の安穩に

ディスカッションテーマ

「立正安国」について学び、
どう思いましたか？

「立正安国」をさらに深めるために

小説『新・人間革命』

- 第2巻 「先駆」の章
- 第5巻 「獅子」の章
- 第6巻 「加速」の章
- 第7巻 「萌芽」の章
- 第9巻 「衆望」の章 etc.